

ハイデルベルク信仰問答より

問 55 「聖徒の交わり」によって、あなたは何を理解しますか。

答え 第一は、信じる者が主キリストの肢として、皆誰もが、キリストの宝と賜物をともにするということ（Iコリント 1:9、12:4-7）。第二は、各人がその賜物を自由に、喜びをもって、他の肢の益と幸せのために用いるべきである（Iコリント 12:14, 21, 26-27、13:5）ということを理解するのであります。

使徒信条における「聖徒の交わり（を信ず）」という告白は、前回の「聖なる公同教会（を信ず）」と同様、告白者に若干の違和感を与えるかもしれません。信仰者は「聖徒の交わり」というものを信じていると言われているのです。もちろん、ここでの「信じる」とは、神を信じることにそのものと同列に置かれるわけではなく、むしろ「私はこういう存在とされている」「このような共同体に入れられている」と信じている、と言い換えたほうが理解しやすいかもしれません。

まず「聖徒」ということば自体が、実は私たちにとってとてつもなく不釣り合いな用語であるということを認識すべきでしょう。なぜなら、私たちは自分が聖くないことをよく知っているからです。心の汚れ、言葉の汚れ、行ないの汚れというものが、しつこくまわりついてきます。しかし、それでも私たちは「聖徒」と呼ばれているのです。ここに福音の真理、罪ある者を「聖い」と宣言する神の恵みがあります。

日本語では「清」ではなく「聖」という漢字が使用されますが、この文字は神の聖さを表すものであり、本来神にしか属さないものです<sup>1</sup>。しかし、その神の聖さが汚れた人間に移されたがゆえに、信者は「聖徒」と呼ばれるのです。それはまさに、「キリストの義を身にまとう」ことによって実現する「聖」です。私たちが「聖」である根拠はここにしかありません。

教会とは、「聖」とされた者たちの集まりであり、そこでは「交わり」が持たれます。「聖徒の交わり」とは「教会」そのものを表す用語とも言えます。「聖徒の交わりを信ず」と言うとき、私たちはこの教会が聖なる人々によって構成されているということを知っているのです。あるいは、教会に属する人々が「聖徒」であるということを知っていると言ってもよい。そして、その一員である自分も「聖徒」であると告白しているのです。

「信ずる」ということは、本来そうは見えない事柄を別の次元で信じていると言えるのかもしれませんが。どう見ても「聖徒」にはふさわしくないような人が「聖徒」と呼ばれている。

<sup>1</sup> 「ἅγιος」（カードーシュ）は「神聖な」「聖い」「取り分けられた」などを意味する。

人間の目には異様なことに映る。しかし、神の目には「キリストの義」によってその人の罪は見えない。この真理を信じるのが「聖徒の交わりを信ずる」ということなのです。

以上の前提に立って、問 55 の「答え」を見てみましょう。この問答の答えには二つの要素が含まれています。

- ①信じる者が主キリストの肢として、皆誰もが、キリストの宝と賜物をともにする。
- ②各人がその賜物を自由に、喜びをもって、他の肢の益と幸せのために用いるべき。

①信じる者が主キリストの肢として、皆誰もが、キリストの宝と賜物をともにする。

まず、信じる者は「キリストの肢」であると言われていました。「肢」とは、木で言うところの幹から別れ出ている枝であり、人間のからだで言えば手足などの各器官を表します。聖徒たちはキリストのからだの器官であり、キリストの「聖さ」をそのままいただいている存在と言えます。更に、「キリストの宝と賜物」も共有していると言われており、それが具体的に何を指すのかは特に説明がありませんが、キリスト者になってから与えられていく何らか奉仕のための賜物と言うことはできるでしょう。祈りの賜物、福音を語る賜物、もてなしの賜物、賛美の賜物、管理の賜物、修繕の賜物……等々。賜物が与えられていない聖徒はなく、自分が主より何を受けているのかを認識すること、どのような分野で主に仕えているのかを知っていることは重要です。②では、その賜物が何のために、誰のために用いられるべきであるかが説明されています。

②各人がその賜物を自由に、喜びをもって、他の肢の益と幸せのために用いるべき。

賜物は個人の楽しみや喜びのためではなく、「他の肢の益と幸せのために用いるべき」だと言われていました。与えられた賜物や能力を、他の信者の益と幸せのために用いることを主は求めておられるのです。私たちが賜物を用いて隣人に仕えるとき、キリストのからだ全体の細胞が沸き立つのでしょうか。

個人的な証になりますが、コロナ期に入ってから奏楽者が礼拝に集うことができなくなり、一時はヒムプレーヤーでの味気ない賛美ばかりになりました。一年経って奏楽者が一人二人と戻って来られましたが、人数が不足しているところにどうにかピアノでの前奏曲で参戦できないかと考え、そのために毎月録音することが心に示されました。このことを通して、「ピアノを弾く」という日々の営みに奉仕の要素が加わり、自分の練習のすべてがこの目的へ向かって進み始めたことを実感しました。

教会に属する聖徒たちは、主のからだのどこに必要があるかということを考え、その隙間を埋めていくことに無常の喜びを見出すことができるはずです。それは時に、誰もやりたがらない奉仕であるかもしれません。主が自分に何を求めておられるか、キリストのからだが生きて活きた状態になるために自分は何ができるかを、常に考えていきたいと思えます。